

## 経営者への活きた言葉

## 読書の積み重ねで新事業の着想を得る

1. 日本銀行のエコノミストだった、村山昇作氏は、50歳過ぎてから日銀を退行、2001年に四国の帝国製菓社長に転身。さらに2011年からは、iPS細胞の知的財産管理を行うiPSアカデミアジャパンの社長を務める。また、趣味が高じて八ヶ岳に天文台を建設。無農薬野菜を生産する会社にもかかわる。人呼んで「神出鬼没のマルチ人間」。現在は、2015年のオープンに向け、天体望遠鏡博物館の建設を準備中だ。
2. 読書家である村山氏は、時代ごとに本の読み方を変えてきた。時間のある若い頃は熟読派。日銀のエコノミストになると、論文を書くのが日々の仕事に。学者ほど時間をかけられない。10～20冊の本を買ってきて、取り上げるテーマに関連する箇所だけを読んだ。50代に入り、帝国製菓の社長に就任して以降は速読派に切り替えた。「1冊を1～2時間で流して読む。若いときは知識を求めて本を読んだが、今は新しい発想を得る手掛かりとして読む」。
3. 現在、香川県さぬき市で準備中の天体望遠鏡博物館のアイデアに役立ったのは、藻谷浩介「里山資本主義」だ。博物館は中古の望遠鏡を廃校となった小学校に展示し、屋根を取り払って星空を観測できるようにするもの。村山氏は田舎の豊かなストックを活用することを説いた「里山資本主義」に着想を得て、寄付をしてくれた都会の人に、地元・多和の空き家を第二のふるさととして開放することを考案した。

(参考:「週刊東洋経済」2014年1月11日号)

## ワンポイント経営アドバイス

## 経営者が持つべき資質は「鳥の目」 奥田 務(J・フロントリテリング相談役)

1. 経営者が持つべき資質は何でしょうか。リーダーシップ、決断力、分析力、…。もちろんこれらは不可欠です。けれど、これらが正しく発揮されるためには、ある前提が欠かせません。それが「鳥の目」を持つことです。
2. 自分が属する企業や産業を一步引いて、外から観察する目を養うこと、もちろん企業経営では、1つの課題を深く掘り下げる「虫の目」や、市場や時代の流れを読む「魚の目」も重要です。けれど、同時に、客観的に物事を見極める目も欠かせません。「鳥の目」を持てば、思い込みにだまされず、問題の核心が見えてきます。

(参考:「日経ビジネス」:2014年1月13日号)